

本書は、著者の三〇余年の研究の総まとめとして編まれたものだという。長年にわたり続けてこられた調査と研究の成果が、この充実した一冊として結実したことを大いに喜ぶたい。

(坂井 建雄)

〔思文閣出版、京都市左京区田中関田町二一七、二〇〇七年二月、A五判、三二六頁、六八〇〇円(税別)〕

看護史研究会 編

平野重誠原著『病家須知』翻刻訳注篇(上・下) 研究資料篇

江戸時代後期の開業医平野重誠(革翁)(一七九〇—一八六七)の著作『病家須知』八卷(一八三二—三四)が三冊に分けて出版された。古文になじまない読者には、まことに親切で、適切な書物であるというのが私の第一印象であった。

看護史研究会の平尾真智子氏所蔵本を底本として、これを翻刻したものであるが、この際旧漢字、俗字、古字、異体字等は現行字体に、変体仮名も平仮名に改められているので読みやすい。本文の下の欄には現代語訳を掲げ、これは原文に忠実というよりは、内容の理解を意図したもので、さらに頭注を付して用語や背景の説明がなされている。その上に膨大な研究資料篇の一冊を作り、原著者や各巻について行き届い

た解説が行われ、索引もテーマ別に六種が用意されている。

全体の監修者は北里研究所東洋医学総合研究所の小曾戸洋教授であり、現代語訳者は東洋医学に造詣の深い、松相堂医院の中村篤彦院長で、本書の信頼性を高めている。

看護史研究会の坂本玄子代表の序文によると、同研究会は『病家須知』を江戸末期の看護書として取り上げ、この本から現代の看護者が学ぶ点を見出そうと考え、幾多の困難をのりこえ、漸く出版に至ったという。これは全く看護史研究会の方々の熱意と努力の結晶である。

さて「病家須知」とは「病人のある家でぜひ知っておくべき事柄」を意味するが、原著者はこれを八巻の構成にして、巻一—四を前篇(天保三年出版)に収め、これに『病家ころえぐさ(意得草、心得草)』の別名を与えている。また巻五—八を後篇(天保五年出版)に収め、これには前篇に対し某宮家から賞賛と『ことぶき草』という書名を賜ったことを受けて、各巻に『ことぶき艸(草)』の別名を与えている。しかし本来の『病家須知』は巻五—六までで、巻七—八はもと『坐婆必研』の書名で別に出版する積りのところ、産婆や妊婦の読者の都合を考えて合刻の形で刊行したと述べている。『坐婆必研』は「産婆必携」の意味であるが、これを原名或は別名として『とりあげばば心得草(坐婆心得草)』を本名にしている。このような表題の複雑さは、後篇が二年遅れて出版されたため、その間における重誠の心積りの変化によるものであろう。

内容は巻一―六が庶民向けの家庭医学・看護全書、巻七―八が重誠自身の経験も混えて産婆に向け図解により書かれた専門書である。その内回転術の記載は、私見では本邦最初で、画期的な書物といふべきである。各巻の内容を強いて簡略に表わすと、巻一「養生・看病」巻二「食」巻三「育兒」巻四「素人向け産科」巻五「感染」巻六「救急」巻七「産婆向け産科正常篇」巻八「産婆向け産科異常篇」となる。今回の『病家須知』では前篇(巻一―四)を上、後篇(巻五―八)を下の二冊としている。因みに『日本産科叢書』所収の『坐婆必研』では、巻七―八と共に巻四を「坐婆必研前書」として加えている。

このように今後出版されるこの種の本のモデルになるような本書であるが、全く問題点がないわけではない。評者としては心苦しいが、敢えて触れさせて頂く。

一つは賀川流の回生術の鉄「鉤」を「鉗子」としている点(上・二八九頁)である。胎児の穿頭・切胎による胎児縮小術後に牽出する回生術で使用するのは、二本で挟んでひき出す鉗子(forceps)ではなく、鉤(hook)で、その形は『日本産科叢書』七六四頁の図や酒井シヅ著『日本の医療史』の図四二に見られるようなものである。賀川支悦が最初に用いたのは竿秤(さばかり)の品物をかける鉤とされているが、秤鉤については張子和(一一五六―一二二八)の『儒門事親』(一二二〇頃)巻七に既に記されていることが、佐伯理一郎の『日本女科学史』に述べられている。当時の玄悦はもちろん知らなかったであ

らう。現在図によって知られている形は秤の鉤そのものではなく、その後改良されたものと思われる。しかしこの形はSmellie『解剖図譜』(一七五四)の鉤に酷似している。

もう一つは「産椅」(下・二四四頁)で、産椅子としてしまうと西洋で産婆の商売道具にもなった分娩椅子と同一視されやすい。しかし産椅は産後に使用されるもので、腰掛けではなく、膝を折り曲げて坐るもので、出産には使えない(緒方正清著『日本産科学史』一一五頁図、一一六頁図)以上産科医の立場からの専門批評であるが、全体からみれば、さして大きなことではない。

今回の『病家須知』の出版により、所期の看護面のみならず、産科面でも研究がますます深められることを願って、刊行に没頭された方々に敬意と謝意を表したい。

(石原 力)

〔農山漁村文化協会、東京都港区赤坂七丁目六一、二〇〇六年九月三〇日、価格二九〇〇円〕

秦 温信 著

『北国から、さわやかな風を』

副題は「医療・保健・福祉の原点を求めて」となっている。著者の秦温信先生は札幌社会保険総合病院(以下、社保総合